

(6) 「GLOBALⅢ」最後の授業での生徒の感想

私は「GLOBAL」の授業にたくさんのことを教わりました。高校入学当初は人見知りでクラスの中でも発言できるほうでもなく、GLOBALⅠの授業でも発表係を選ばず、消極的でした。そんな私をGLOBALⅡの研究が変えてくれました。すべて英語での研究でしたが、周りの人に支えられ、発表まで挑戦し、英語もまともに話せなかった自分が発表会で発表したこと・経験を通して自分に自信が持てるようになりました。海外修学研修でも研究発表し、海外の人に伝え、「SGH甲子園」でも大勢の人に向けて発表し、自ら積極的に発信・発言していくことの大切さを学びました。

また、SGH甲子園で他校の生徒の研究の素晴らしさに圧倒され、GLOBALⅢで研究を他校に負けないくらい充実させてやる！と意気込んで始めました。

提言としてはPR動画の作成など、高校生としてできることを行うことができ、達成感があります。研究としては納得できない点もありますが、大学でより深めていきたいです。

GLOBALⅢで、学校の先生方、岡大の先生方、そして自分が所属した「国際塾」で出会ったたくさんの大人の方々に、研究に協力していただきました。だからこそこまでやり遂げることができたと思います。今後またたくさんの人たちと関わりを持つことの大切さ、得られるものを忘れず、生活していきたいです。他にもたくさん学ぶことができました。本当にありがとうございました。

1年間ありがとうございました。

私は4月にGLOBALⅢで何をしたいかを発表した際、我ながら他の人よりもビジョンがはっきりしていて、スムーズに研究を進めることができるのではないかと考えていました。しかし、実際に研究を始めると、データ集めに非常に苦労しました。人前で発表する際に自信を持って言える正確なデータはなかなか集めることができませんでした。しかし、GLOBALⅢを通じて少しではありますが、どのようにデータを集めればよいのかを学べたと思います。大学での研究に活かしていきたいです。

また、市役所の方に話をうかがったりと、社会とつながりながら研究を進めたことで、礼儀を学ぶことができたと思います。このように学校外の人との協力を得つつ、研究を進めたことは良い経験ができたと思います。データ収集能力とともに、大学で活かしていきたいです。

1年間、お忙しい中ご指導いただき、ありがとうございました。

テーマがなかなか決まらなくて、研究の開始が遅くなってしまい、最初はどうなることかと思いましたが、なんとか上手くいって、無事最終発表まで終えることができ、よかったです。

GLOBALの授業で培った資料を探す力、人前でプレゼンテーションする力、レポートを作成する力、答えのない問題に取り組む力などは、今後、大学や社会に出た時に必ず必要となる力です。これらの力を高校の時点で得られるシステムを提供してくれる高校は少ないと思うので、そういった力が身につくのが嬉しく思います。今後も3年間のGLOBALで培った力を活かして頑張っていきたいです。

今までありがとうございました。

3年間のGLOBALで研究をしていく中で、何から始めて良いのか分からず、行き詰まったこともありましたが、情報収集、パワーポイントの作成、専門家の方への問い合わせなど、今まで経験してこなかったことを経験することができたので、とても充実した授業になりました。ありがとうございました。

中学までは、社会に対して特には関心がなかったのですが、GLOBALの3年間の授業を通して日本社会や世界の諸問題への問題意識が芽生え、これからの未来を担う世代として問題解決に携わりたいと強く思うようになりました。

また、私の能力不足なのですが、GLOBALⅢでは研究の進め方の詰めが甘く、もっと深めたかった点が多々あります。批判的思考を用いたり、集めた多くの情報を統合したりすることの難しさを痛感しました。これらのできなかつた点や反省点を、大学での研究に活かしていきたいです。また、3年間のGLOBAL、特にGLOBALⅢの研究では、行き詰まって心がくじけそうになったり、周りが受験勉強をしている様子を見て焦ってしまったりと、辛い局面も何度もありました。ですが、課題研究での学びは、学校の授業科目（特に国語や英語）での成績向上にもつながったと感じます。AIなどが台頭するこれからの時代には、高校生や中学生にも自分で課題やテーマを設定し、情報収集やフィールドワーク等を通して、自分で解決策を探求していくような学びがますます求められるのだろうなど、GLOBALを通して実感しました。これらのことを気づかせてくれ、問題意識や知的好奇心を育ませてくださった城東高校のGLOBALの授業に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

私がGLOBALⅢを選択して良かったことは2つあります。

発表の時言い忘れていましたが、1つ目はGLOBALⅢがきっかけで行動力が上がったことです。フィールドワークを通し、自ら情報を求め動くことの大切さを知りました。今では、興味のある様々な分野の講演会に積極的に参加しています。

2つ目は、自分のできないことや苦手なことが分かったことです。時間の使い方の大切さや道すじの立て方など、自分にはできない事がたくさんあることが分かりました。中でも私はブラインドタッチができず、とてもかっこ悪いので、そこをまず改善しないといけないと感じました。

これらのことは、大学生になってからの生活に生きてくると思うので、GLOBALⅢで身に付けた力を、しっかりと伸ばし生かしていきたいと思いました。

今回の研究を進める中で、たくさんの人と関わりました。もちろん単独研究であるため、自分自身の力で頑張っていかななくてはなりませんでしたが、今このように研究を完成させることができたのは自分だけの努力ではないと強く思います。度々研究に行き詰まってしまう、何をすればいいのか、次のステップへと進むことができない状況がありました。そんな時は先生方が良いアドバイスをくれ、一緒になって考えてくださいました。また、ダブルの友達をはじめとする外国人の方や、親切な対応で迎えてくれた市役所職員の方の存在があったから研究内容を深くすることができました。

このように、GLOBALⅢの授業の中で改めて人とのつながりと自ら行動することの大切さを知ることができました。また、私が一番時間をかけて完成させた論文は、今までの活動で得たことを全て発揮し作り上げたものです。書き方や構成、表現の仕方などたくさんの障害がありましたが、それら乗り越えることができたと思います。高校生だからできる、逆に今しかできない研究、学び、経験を得ることができ、本当に良かったです。GLOBALⅢを選択して心から良かったと思います。これが終わりではなく、これからの研究活動の大きな一歩だと考え、大学生になっても頑張りたいです。最後の授業に参加できずとても残念ですが（受験のため欠席。この感想は前もって記入）、本当にありがとうございました。

1年生から3年生まで、「身近な部分での世界とのかかわり」をGLOBALで研究しました。1年生の時は「こたつ」という日本人に馴染み深いものから世界を見つめ、2年生では岡山県の高齢者宅でホームステイを受け入れるHEP (Homestay with Elderly People) Program を提案し、今年ホームステイに絞らず、インバウンド増加の役に立つために、ひとりの高校生にできることを研究しました。

半年と少しの間、大きな目標の「岡山県に外国人客をもっと呼ぶ！」は一貫したものの、何によってその目標を達成するのかという本題の部分が安定せず、焦ってばかりでした。その中で岡山大学と城東高校の先生方のアドバイスを大いに参考にして、少しずつ軌道修正してきました。特に、岡大の先生方には辛口のコメントも貰いましたが、挽回するのびしろが増えたことにして、これから先の4年間を過ごそうと思います。

ただ、高校を終えると一人で決断することが今よりも増え、GLOBALⅢのように誰かの助言が貰えることが減っていくと思います。GLOBALⅢで多少は自分で判断する力がついたと思うので、それをこれからの生活の中でいかせるように頑張ります。先生方にはいろんな視点でアドバイスを頂き、スタート地点を確認し直すことの大切さも教えて貰ったので、それらを参考に同じように決断・判断していこうと思います。つまり、GLOBALⅢでは研究のやり方だけでなく、生きていく中で大切なことも学べたということです。

最後に、発表することを通して多くの人の考え方を取り込む機会をたくさん準備してくれ、さらに一緒に出張までしてくれたS先生をはじめとして、関わってくださった先生方、鼓舞し合っただんばってきた4人の仲間たち、ありがとうございました。O先生とR先生には、特にありがとうございました。

GLOBAL I のA群B群、GLOBAL IIはグループでの研究だったので、自分のやりたいことができず、GLOBAL IIIを選択しました。自分一人で研究をするにあたって、好きなことができるというメリットもありましたが、全てを一人でしなければいけないという負担や責任感もありました。また、研究のテーマ上、参考文献や先行研究があまり存在せず、行きづまることも多くありました。そんな時に、担当の先生や大学の先生からアドバイスをいただけたので、最後までやりきることができたと思います。本当に感謝しています。

不十分な点もありましたが、自分が知りたいことを自分でデータや資料を集めて調べ、オリジナルの答えを出すことができたGLOBAL IIIの1年間の研究は大切な財産になったと思います。主体的な学びによって大きく成長することができたのを実感しています。

大学やその先の将来に必要な論理的な研究。思考の運び方、主体的に動く力などを高校生のうちに得られ、自信にも繋がっています。今回の研究で不十分な点はこれからの課題として、この先も長く向き合いたいと思っています。

1年間GLOBAL IIIに取り組んで多くのことを学びました。最初の頃は研究テーマがなかなか定まらず、時間だけが過ぎていき焦りました。個人的には宇宙関係の研究をしてみたいと思っていたので、宇宙開発に使われるシアノバクテリアの研究ができてよかったです。

今回は1年生や2年生の時とは違って、インタビューやアンケートをとっていくような研究ではなかったので、どのように研究していけばいいのかわからないことがたくさんありました。N先生から実験方法の指導や様々なアドバイスをいただき、新しい研究の進め方を身につけることができました。論文の添削の際には論理的に伝えるためのコツなども教えていただき、岡大の先生方にも褒められるもののできたのは嬉しかったです。先生方には本当にお世話になりました。この経験を大学でも活かせるように受験をがんばっていこうと思います。1年間ありがとうございました。

GLOBAL IIIの取組は自分にとって良い経験となった。自分の研究したいことを授業の一環として行えて、また、先生方のサポートを得られたことを考えると、とても良い環境だったと思う。

研究を進めていく上で一番に感じたことは、最初自分でイメージしていたことの通りにはスムーズに進行しないということだった。計画通りに事が動いたことは一回もなかった。だから、何よりも大切なのは、まずはアクションを起こしてみる。そうすることで、現状の自分の立ち位置が見えてくる。イメージと現実のギャップを埋めていくことができる。そうやって自分にできることを把握することが、研究でも勉強やその他のことでも大切だと学んだ。GLOBAL IIIを通してやり遂げることの達成感はもちろんのこと、こういった教訓も学ぶことができた。そして、この研究は先生方のみならず、城東生、インタビューに答えてくれた教授や研究員の方々、アンケートに協力してくれた一般の方々、アドバイスをくれた方々など、多くの人の協力の下で完成させることができた。自分も、将来はこのように時に協力を惜しまずに、出来る限りのことをすることで、恩返しをしていきたい。今回のGLOBAL IIIの経験は必ず後に生きてくると思う。GLOBAL IIIを選択して良かったと思う。

2. 研究仮説の検証

(1) 研究仮説について

【研究仮説】

- ① 全ての教科・科目で、課題解決力、思考力・判断力・表現力、活用力を高める学習が推進される。
- ② この事業に直接関わる授業以外でも、生徒の自立的学習や言語活動を推進することとなる。
- ③ 生徒のチャレンジ精神や主体的学習意欲が高まり、様々な分野でのコンテストや社会貢献活動への自主的な挑戦や企画、参加が増加する。

SGHの取組について仮説を検証したり、成果や課題を洗い出すため、次の調査等を実施してきた。

- ・SGHに関する調査（生徒対象 H26～H30）
生徒に課題研究を通じて身に付けさせたい力が、どれくらい身に付いたかを問う質問紙調査
- ・GPS-Academic調査（ベネッセコーポレーション H28～H30）
生徒に「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」といった3つの思考力がどれくらい身に付いているかを測る調査
- ・SGH意識調査（生徒対象 H29）
生徒にSGH事業で取り組む「課題研究」「学類コア科目の学習」「海外での体験活動」を通じて、どのような力が身に付いたかを問う調査
- ・SGHに関する取組や関連する取組についてのアンケート（教員対象 H30）
教員にSGHで目指す能力について、どういった指導が効果があったか、生徒の変容につながった取組は何かを問う調査
- ・授業実践例調査（教員対象 H30）
教員にSGHで目指す資質や能力を身に付けさせるための、平素の授業例を問う調査
- ・スーパーグローバルハイスクールに関するアンケート調査（卒業生対象 H30）
大学での学習に役立ったSGHの取組や、大学入学後の留学等の状況を調査

(2) 研究仮説の検証

仮説① 全ての教科・科目で、課題解決力、思考力・判断力・表現力、活用力を高める学習が推進される。

平成30年度の授業実践例調査では、これまでに取り組んだことがある課題解決力、思考力・判断力・表現力や活用力を高めるよう工夫した授業について、事例の提出を各教科に求めたところ、全ての教科から、合計33の授業実践例が提出された。

提出された授業実践例は全て課題解決力、思考力・判断力・表現力や活用力を高めよう工夫されたものであり、全ての教科で課題解決力、思考力・判断力・表現力、活用力を高める学習が実践されたことがわかった。

授業実践例では、「指導の工夫した部分」と、その指導について「実践したことでの成果」を示している。

【指導の工夫した部分の例】

- (1) 自分の立てた「問い」を付箋に書き、グループ内で分類し、話し合っって根源的な「問い」を作る。(国語)
- (2) 与えられた材料をどのように組み合わせれば比較実験が成立するのか、班で計画を立てさせる。(家庭)
- (3) 解答を板書する人、板書を説明する人などグループ内で分担させ、各グループの代表を、他のグループに移動させ問題を説明させる。(数学)

【実践したことでの成果の例】

- (1) 生徒のエッセイを読むと、自身を取り巻くイデオロギーについて関心を深め、自分の意見が明確に書けているものも多く見られた。(国語)
- (2) 洗剤・汚れ・試験布をどのように組み合わせれば比較実験が成立するのか、班ごとに計画を立てさせたことで、生徒は積極的に実験に臨んだ。(家庭)
- (3) 最初は、おぼつかない説明であったが、繰り返すうちに説明のポイントがわかるようになり、どのように説明したら相手に伝わるか考えながら説明できるようになった。(数学)

授業実践例をいくつか掲載しているが、33の実践例には「グループで意見を出し合う、話し合いまとめる」「意見や考えを比較しながら相互に評価する」「発表に対して疑問点を質問する、課題を指摘し合う」などの指導の工夫があり、本校の教員がSGHの取組を進める中で工夫してきた指導が授業に生かされ、課題解決力、思考力・判断力・表現力、活用力を高める学習が推進されたといえる。

仮説② この事業に直接関わる授業以外でも、生徒の自立的学習や言語活動を推進することとなる。

平成30年度に、SGHで身に付けさせたい力を伸ばすような授業実践例を調査したところ全ての教科から33の授業例が集まった。この例のうち30事例(90.1%)の指導には、「話し合う」、「主張と論拠を伝える」、「考えを紹介する」といった言語活動が含まれていた。

こうしたことから、SGHの事業を進めて行く中で、指導の改善が図られ、仮説にあるように言語活動がSGH事業に直接関わる授業以外でも実践されたといえる。

また、平成29年度に生徒を対象に実施した「SGH意識調査」では、記述の回答に

- ・他の人の発表を常に批判的にとらえていたので、他の教科の学習でも批判的にとらえることが出来るようになった。
- ・英語がうまく話せなくても、気にすることなく英語で質問できるようになった。
- ・自分が世界についていかに知らないかを理解したので、より真剣に学ぶようになった。

といった、生徒の自主性や積極性が伺える記述が多くあった。このことから、生徒の行動や考え、意欲が成長していることも分かった。

一方、授業実践例にあるように教員の指導は変わってきているが、まだ、自立的学習が推進されたといった状況には至っていない。

生徒を主体的な学びに向かわせる指導のスキルや、生徒の資質能力は向上しているので、今後は、育成したい生徒像として「自主的・自律的に行動できる生徒」を掲げ、全校で自立的学習を推進していく。

仮説③ 生徒のチャレンジ精神や主体的学習意欲が高まり、様々な分野でのコンテストや社会貢献活動への自主的な挑戦や企画、参加が増加する。

SGH事業が始まってから、「グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数」を調べているが、平成29年度に68名が参加しており増加傾向にある。

SGHの取組を通じて、チャレンジ精神や主体性を発揮する機会も増え、コンテスト等に挑戦する生徒が増加している。

図9のとおり英語の外部検定試験（英検、TOEIC、TOEFL、GTEC等）を受験した生徒数も増加しており、平成25年度は502名であったが平成29年度には858人になっている。

また、進学についてもSGHに取り組むことで、将来の目標や進路が明確になる生徒も多くなり、図10のとおりSGHの対象学年である28年度以降、国立大学を推薦入試やAO入試で受験する生徒も増加している。

平成28年度に課題研究GLOBALⅢを選出した3年次生の研究成果をまとめた論文が、「第11回NRI学生小論文コンテスト2016」（NRI：野村総合研究所）で「奨励賞」を受賞（高校生への部の応募論文2,915点の中から、上位27点の1つ）「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2016」で「審査員特別賞」を受賞（応募総数30,078点のうち、上位10位以内）するなど、大きな成果を残した。

平成29年度には関西学院大学で「SCI-TECH RESEARCH FORUM2017」が開催されたが、本校から2年次生6名の生徒が自主的に参加し、高校生や大学生が発表する中、質問し意見を述べ、また、自分の研究に関連する大学院生や大学教員から情報を得るなど意欲的に学習した。

さらに、チームを作り、世界が共通に抱えている課題を解決するためのプランを作成・提案する大会「The Global Enterprise Challenge 2018」に2年次生7名が挑戦するなど、外部の機関が実施する大会へ自主的に参加する生徒も出てくるようになった。

【生徒が参加した主な大会等】

高校生グローバル会議、アスペン古典セミナー
ジャクサ君が作る宇宙ミッション、
G7倉敷教育大臣会合公開シンポジウムなど

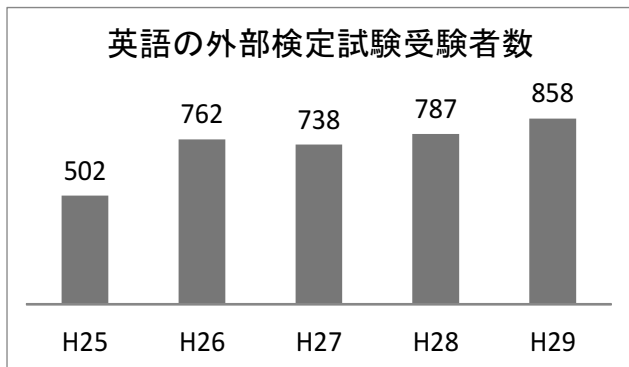


図9 外部検定試験受験者数(H25～H29)

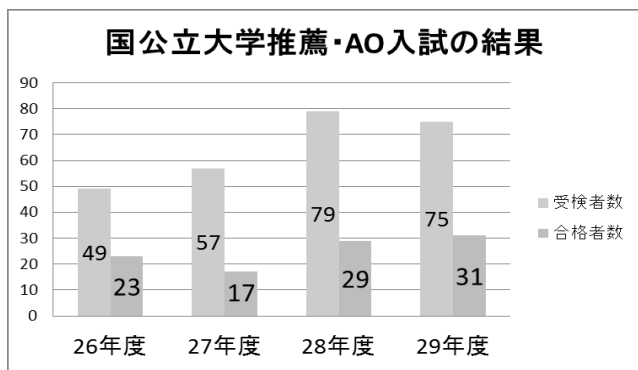


図10 国立大学推薦・AO入試結果(H26～H29)



【審査員特別賞の表彰の様子】



【「The Global Enterprise Challenge 2018」に出場】

3. 研究成果の発信

(1) 学校間交流

平成26年度から研究指定を受け、課題研究発表会を毎年度2月に実施し、県内の高等学校やSGH指定校を招待し、成果の発表を行ってきた。

平成28年度以降は、県内のSGH指定校である岡山県立岡山操山高等学校、岡山学芸館高等学校と相互に出向き研究成果を発表することとした。

平成29年度からは、県外の学校との交流も進み、平成30年2月には、愛媛県立松山東高等学校が中心となって開催された「中四国SGH高校生会議」（愛媛・大阪・岡山・広島・高知・徳島から計43名参加）に3名の生徒が参加し、本校の紹介や、研究内容について発表を行った。平成30年度は7月に徳島県立城東高等学校が主催する中四国SGH発表会に生徒1名が参加し、課題研究の研究成果の発表と、グローバル人材に関するシンポジウムで意見交換をした。

(2) 課題研究の発表

平成29年度、30年度は、文部科学省が主催するSGH全国高校生フォーラムに2年次生が参加し、GLOBAL II での研究成果を英語で発表した。

また、関西学院大学が実施するSGH甲子園にも積極的に参加しており、平成28年度以降、毎年ポスター発表、ディスカッションそれぞれに参加している。

このような校外の発表機会に参加した生徒が、他校生徒の取組を参考に自らの研究に工夫・改善を加え、それを校内で発表する姿が見られ、本校生徒により影響を与えている。こうした取組が本校の課題研究の充実に役立つと同時に、校外で発表することで生徒の課題研究の成果を発信することができた。

(3) 研究成果の報告

平成26年度から、毎年度、SGHの研究から明らかになった成果や課題、また、改善点を取りまとめた「スーパーグローバルハイスクール研究開発実施報告書」を、全国のSGH校及び岡山県内全ての高等学校に配付することで、成果を発信してきた。



【岡山操山高等学校での成果発表の様子】



【徳島県立城東高等学校でのシンポジウムの様子】



【SGH甲子園でのディスカッションの様子】



【成果報告会の様子】

平成29年度には研究指定4年目までの研究の状況を分析し、成果や課題を教職員が共有するとともに、新しい学習指導要領における学力についての理解を深めることを目的に、SGH成果報告会を実施した。報告会では、独立行政法人大学入試センター審議役の大杉住子氏を招聘し、「次期学習指導要領が育成を目指す力と課題探究への期待」という演題で講演をいただき、あわせて本校の研究成果を発表した。会には、県教育委員会から3名、県内の大学から3名、県外高等学校から3名、県内高等学校から17名の参加があり、発表した研究成果に多くの質問や意見をいただいた。

平成30年度には、岡山県が主催する「平成30年度高等学校学力向上プロジェクト合同分析会」で、学力向上に向けた本校のSGHの取組を県立高等学校・中等教育学校の参加者に報告した。また、岡山県教育委員会が発行する教育時報（平成30年10月号）に事例紹介として、本校のスーパーグローバルハイスクールでの取組を寄稿した。この中では、取組の柱である課題研究、学類コア科目等、海外での体験活動の説明、また、SGHによる生徒の変容を紹介している。研究指定の最終年度である平成30年度は、平成31年2月6日に研究成果を報告するSGH成果報告会を開催し、広く成果の発信を行った。

4. 成果や課題

本校では、SGHの取組の柱として、課題研究、学類コア科目を中心とする専門性、また、海外の体験活動を関連付けながら取組をすすめてきた。このように、それぞれの取組を関連付けながら実施することで、個々の活動の効果を見つめ直すことにつながり、指導の工夫や大きな改善・充実を図ることができた。

課題研究や学類の専門学習では、岡山大学の教員や大学院生、アシスタントティチャー、留学生など、外部の人材に協力いただき学習を深めてきた。こうした外部の人材による指導は、生徒の興味関心を高めるには大きな効果がある。

研究指定後、提携している姉妹校とスカイプによる交流が始まったが、事前に意見を交わしておくことで、訪問時のディスカッションが非常に質の高いものになった。現地に行かなくても、あらかじめスカイプ等で交流することの効果や、事前学習の有効性が実感できた。

また、課題研究に取り組んだことで、平成31年度から先行実施する「総合的な探究の時間」に取り組むための体制が整備されたとも言える。そうした体制の中で、課題研究で身に付けさせたい力を意識しながら授業を工夫することで、主体的・対話的な深い学びが学校全体で進められたことも成果である。

さらに、本校が目指した「グローバルな視野」「主体的・協力的な実践力」が、高校での教育活動を通じて身に付いたかといった質問に対する卒業生の高い肯定的な回答割合からも、本校のSGHの取組が、学んだ生徒自身が学習効果を実感できるまでの成果を上げたと考えられる。

5年間の取組の中で、各教科がそれぞれどういう力を育成するのかの整理が十分でないことや、学校全体で育成したい生徒像を共有していくこと、また、探究学習の継続・深化をどうするかといった課題もあり、対応していく必要がある。



【スカイプでの交流の様子】

身に付いた	どちらかといえば身に付いた	どちらともいえない	どちらかといえば身に付かなかった	身に付かなかった
37%	44%	12%	3%	3%

5. これまでの取組

(1) 「GLOBAL I」

科目「GLOBAL I」は、1年次生全員を対象として、「グローバルな社会や経済等について基礎的な知識を身につけるとともに、探究や発表の方法・内容について学び、探究型学習の基礎的技能を身につける」という目標のもと、3単位で実施した。

1単位は「GLOBAL I 情報」として、情報収集の手法や情報機器の操作技術を学習し、課題研究の探究型学習や研究成果のプレゼンテーションを実践するための基礎的知識や技能の習得を図ることを目的として1年次の前半に実施した。

年度の後半は、身近な生活の中的话题をテーマにした「GLOBAL I 課題研究A群」と、グローバルな課題や異文化への理解などをテーマにした「GLOBAL I 課題研究B群」を実施した。生徒は研究テーマに関する情報を広く収集し、互いに意見を出しながら協議し、解決策を検討した。研究成果はポスターセッション形式、プレゼンテーション形式にまとめ、発表した。

「GLOBAL I」は、2年次に実施する「GLOBAL II」につなげていく基礎づくりではあるが、グローバル社会への理解を深めたり、探究型学習の基礎を身につけたりできるよう、国際社会で活躍する人や、課題研究の専門家からの講演などを計画し、実施した。

また、毎年度、岡山大学の大学院生・学生の方に、ティーチング・アシスタント (TA) として協力を依頼し、情報収集の仕方・レポートの作成方法・プレゼンテーション資料の作成・プレゼンテーションの方法などについて指導いただいた。

① GLOBAL I 情報

情報化社会が進む中で、ほとんどの高校生が情報機器を活用している。本校では、スマートフォンなどを利用して自分達の考えを表現する、必要な情報をインターネットを使い収集する、情報機器を利用して発信するといった能力は高いものの、文書作成のソフトで文書を作る、表計算用のソフトにデータを入力し計算する、取りまとめたデータからグラフを作る、また、プレゼンテーションソフトを利用して自分達の考えを分かりやすく表現するといった技術については、個人差も大きく、こうした機器を高校入学時にはうまく使えない生徒が多い。

1年次の前半は、教科「情報」の「社会と情報」の1単位を教育課程の特例を利用し、学校設定科目「GLOBAL I 情報」として主に情報機器を活用させながら、パソコンのアプリケーションソフトを活用しつつ、文書を簡条書きとしてまとめさせたり、数値を入力し、グラフを作らせたり、相手に伝わりやすいレイアウトの工夫をさせたりするなどして、表現する方法を主に学習させた。

また、インターネットを活用し情報を収集させ、入手した情報が信頼できるかどうかの判断を注意して行わせるなど、情報の信憑性を意識させる学習をさせた。

ここまで5年間取り組んできたが、個々の生徒の情報スキルも大きく異なっていることから、平成28年度からは、例えばタイピング練習等の対応レベルを生徒によって変えるなど、学習させたい内容を十分確認しながら生徒に対する教材を複数準備して、個々の生徒の実態に即した演習を行った。

週1時間の実施ということもあり、なかなか多くの教材に触れることはできなかったが、課題研究を実施する上で特に必要なソフトを中心に授業を進めていたこともあり、年度の後半には、ある程度は資料を作れるレベルに到達していた。



【プレゼンテーションソフトでの資料作成の様子】

② GLOBAL I 課題研究A群

(a) 実施概要

1年次の課題研究A群（10月中下旬～11月末）は、5人のグループ研究で、発表形式がポスターセッションと定められている。1年次生にとっては初めての研究であり、「そもそも研究とは何か」を説明するところから始まるため、授業の半分近くは講義になる。

(b) 平成26年度 of 取組

研究テーマに沿ったリサーチクエスチョン（RQ）の設定ができるように、ジェンダーギャップ指数、ベーシックインカムなど13種類 of 話題を準備して指導に臨んだ。しかし、生徒たちは「疑問に思う」ことができず問いの設定に躓き、苦手なPC操作に戸惑い、発表当日の朝になっても過半数のポスターが白紙状態であった。これではRQ of 具体化や結論との整合性を確認する余裕などない。なんとかポスターセッションはしたものの、生徒からは「難しすぎる」「時間が足りない」「5人は多すぎるから2人組にしてほしい」などと不満の声があがった。発表後の外部評価では、次のような指摘を受けている。

- ・問い of 具体化ができていないし、結論と対応していない。
- ・正義の味方のような発想ばかりで、多面的検討ができていない。
- ・改善策や解決策 of 提案がない。世の中を良くしようという発想がないのか。
- ・探究 of 手法や論文 of 型が指導できていない。

(c) 平成27年度 of 取組

A群に与えられた期間だけでは指導不可能と考え、4～10月実施 of 家庭基礎 of 授業に事前学習を組み込んだ。最初 of 単元から「疑問に思う練習」を始め、班で1枚 of 提出物を完成させる体験も取り入れた。また、A群 of 説明プリントを「A群テキスト 研究レポート編」「ポスターセッション編」として初回授業で一斉配付した。そうすると問い of 設定まではスムーズに進んだが、その次の段階で途端に生徒 of 動きが止まった。情報収集や分析 of 方法までは事前指導していないからである。

(d) 平成28年度 of 取組

事前指導として、新たにアンケート of 質問項目 of 作り方を取り入れ、テキストに「調査入門編」を追加した。8割以上 of 班がアンケート・インタビューを実施したいと意欲を示したが、内容チェック、外部への依頼・交渉、印刷など1人の教員では対応できる量が限られ、半数は断念させるしかなかった。これらがスムーズに進まない原因の一つにPC操作が大きく関わっている。検索技術 of 未熟さゆえに二次データが探せず、自分で調査するしかないと思込む。アンケートが作りたくてもWordが使いこなせない。データはExcelで計算処理できることを知らないし、グラフ of 作り方も分かっていない。

(e) 平成29年度 of 取組

この年からA群 of 期間が1週間短縮されたため、家庭基礎での事前学習を含め、すべての授業計画を立て直した。PCへの苦手意識が研究活動 of 大きな妨げになっていたため、家庭基礎 of 授業の一部をコンピュータ室で行い、せめて「保存」「図の貼り付け」などの基本操作はできるようにと指導しExcelで単純なグラフ作成も経験させた。

(f) 平成30年度 of 取組

課題解決が非現実的で安易な発想に終わることがないように、「MECE」「ロジックツリー」などを紹介し、テキストにも取り入れた。情報収集と整理・分析に充てられるのは実質2週間であるため、十分とは言えないが、どの班もよく話し合い考えを深めようとしていた。SGH指定1年目は、各班5人の情報共有や作業分担がままならず、人数を持てあましていた。データを見ても「何も思わない」と途方に暮れていた。それが今では意見交換や分業が成立するようになり、「4人班は不利」と言うようになった。自分が班のために何ができるか考え貢献できる生徒が増えてきた成果だと考えている。

③ GLOBAL I 課題研究B群

(a) 平成26年度の取組

研究過程において、班内外で意見・考察を述べる議論を大切にコミュニケーション力の向上を生徒に求めた。成果として、発表時も含めて積極的に意見を述べる生徒の姿が見られた。また、初年度ということもあり日本史、地理を中心に研究テーマの概要を具体的に示して研究にあたらせ、次年度B群に取り組む生徒への先行研究を示すことができた。

(b) 平成27年度の取組

生徒の活動状況を把握し適切な指導の参考とするために、班ごとに授業後のレポート提出を課した。しかし、記入時間の確保ができない班も見られ、活動把握は不十分であった。

(c) 平成28年度の取組

前年度から始めたレポート記入の時間を10分間確保し、班員間の情報交換と次回の活動の確認などを主な内容とした。また、TAとの連携を強化する対策として、授業前に指導・助言して欲しい内容について、打合せを丁寧に行い、授業の最後にはコメントをしてもらった。このことによるTAと教員の連携強化は生徒への助言・指導にも生かされた。

A群でまず「研究の進め方」等について、テキストを用いて行う丁寧な学習と1本目の論文作成の実践を行い、B群では、その反省や経験を活かして2本目の論文作成と新たにパワーポイントを用いた発表を行ってきた。このことを通して、「GLOBAL II」に向けて個人や班で協同して研究活動を行う基礎的な力とその態度を身に付けるかたちが見られた。

(d) 平成29年度の取組

事前の全体説明会で、必ず先行研究（書籍・論文）に目を通し、参考文献として掲載することを周知徹底した。また、提出時の「書式」にこだわらせることで、次年度「GLOBAL II」を実施する上で必要となる研究上の「作法」を生徒が習得できることを目指した。教員側の指導体制の面では、従来からの担当クラス制に加えて、各専門科目に関する質問を、各班の研究計画シートを通して該当教員とやりとりすることで、より専門知識な指導・助言が可能となった。

(e) 取組からの成果や課題

担当する地歴科教員が一人であるため、全体27班（3クラス120人）のコーディネーターに時間や注意が向いてしまい、各班の研究内容を十分に把握したり、指導したりすることが十分にはできず、内容の事実誤認をすることもあった。

校内先行研究の活用について、研究内容をさらに深めていくことには、あまり利用されていないようである。研究を進めていく上での先行研究の意義や利用方法の理解は全般的に不十分であった。「GLOBAL I」は9クラスが個別の時間に行われているので、クラス発表の時期を揃えた場合の授業時間数の差は大きく、生徒への負担や成果への影響が懸念される。

班ごとに個別テーマを設定し、研究を進めていくためには基本的な地理歴史・公民分野の知識が不可欠である。現状では、中学校での社会科や、1年次の現代社会で学んだ内容がそのベースとなっている。質の高い研究を進めるために、必要となる基本的な知識をどのように身につけさせつつ指導していくかが今後の課題と考える。

様々な課題はあるが、調査・分析を踏まえ生徒が積極的に取り組むことにより、成長のあとが見られたのは成果である。

(2) 「GLOBAL II」

① 「GLOBAL II」の基本方針及び実施概要

「GLOBAL II」においては、「GLOBAL I」で学んだ技術や手法をもとに、より発展的な探究型学習を展開する。岡山大学や地域経済界等と連携して課題解決に向けた研究を行うことで、学問的・探究的に学ぶ態度を養い、グローバルな視野と主体的・協力的な実践力の涵養をねらいとする。

このねらいを実現するため、次のような基本方針を作成した。

「GLOBAL I」で経験した課題研究をより深めるため、岡山大学の教員や経済界等と連携し、専門的な立場から研究テーマについて歴史的背景や文化的背景を含む指導や助言を受ける。また、ティーチング・アシスタント（以下TA）として岡山大学大学院生・大学生から、イングリッシュ・ティーチャー（以下ET）として外国人講師からの協力を得、より深い研究活動を目指す。また、2年次では生徒が4学類に分かれることから、各学類の得意分野を生かしつつ、互いを補完し合いながらひとつの課題研究を完成させる「異力の統合」を目指す。プレゼンテーション能力を高めるために、10月にグループ毎の中間発表、1月にはグループ毎の研究発表会を行い、その結果をもとに選抜された代表班が2月のSGH課題研究発表会で発表する。

このような基本方針に基づき、以下のことを定めた。

- ・「総合的な学習の時間」のうちの2単位を利用し、2年次の水曜日6・7限の2時間連続で実施する。
- ・「経済・産業」「国際貢献」「環境・安全」「教育・文化」の研究領域を設け、各研究領域で2つ、計8つの大きな研究テーマを設定する。生徒はそこから興味・関心のある研究テーマを選択し、課題研究活動を行う。
- ・班の編成では異なる学類の生徒が同じ班になるように工夫し、各学類の得意分野を生かして活動させる。
- ・2年次団教員全員、大学教員（研究テーマ毎に計8名）、TA（研究テーマ毎に計8名）、ET（2名）で指導にあたる。
- ・大学教員には、研究の立ち上げ・中間発表・最終発表の年3回、TAとETには毎時間参加してもらう。
- ・研究成果として、プレゼンテーションソフトでの発表をさせるとともに、A4判10頁以内の研究論文とA4判1頁の研究の概要（日本語と英語の両方）を作成させる。

② 平成27年度の取組

「GLOBAL II」の取組としては初年度となった。前年度の準備期間に策定した方針に従って展開した。教員をコーディネーターとする方針は変更しないが、「GLOBAL I」の生徒の活動を鑑み、生徒の研究活動の状況を把握し、随時助言を行い生徒の活動の援助を行う。積極的な支持ではなく、あくまでも方針や見通し等の修正や助言を行い、TAやETと協力し、生徒の深い課題研究へと促すことを念頭に教員は指導に入った。

前半は、学類研修の中での意見交換やディスカッションに向けて、研究内容の基礎知識の習得のための調べ学習が主となった。この調べたことをもとに、考察を加え、問題点を明らかにすることに主眼を置いて取り組ませた。また、この時点で解決策の具体的な内容までの到達は難しいと考えられるが、問題点とその解決に向けての仮説を見だし、学類研修に臨む準備を行った。この期間を通じ、生徒とTAやET、教員との意思疎通の円滑化をはかり、課題研究での指導・協力関係を強化するねらいも含んだ。

後半では、学類研修での経験やディスカッションをもとに、自分たちの研究をより深めると共に、問題解決に向けての具体的な方法とその実現に向けて自分たちのできること、すべきことを提言にまとめた。また、この際にできうる限りでフィールドワークなど自ら行動し実践することを行うようにした。

こうして行った課題研究の総まとめとして発表会を行い、代表者は2月に行われた課題研究発表会で1、2年次の生徒全員の前で発表した。なお代表者は当初各テーマごとに1つの班を想定していたが、より多くの生徒が自分たちの研究成果を発表できるよう

考え、各テーマごとに全体に向けてプレゼンテーションを行う班と、ポスターセッションを行う班の2つの班を代表者として発表させた。また、それ以外の班は作成したパワーポイントを掲示した。

初年度ということで、当初想定していなかった問題も起こったが、その都度年次団の教員全体で問題点を共有し、解決策や善後策をとることができた。生徒は、活動の回数が増えるごとに研究の幅が広がり、積極的な提案も出るようになった。また、今年度は課題研究を行う際に英語を主に用いて発表するグループを募ったところ、多くの申し出があった。そうした班のサポートをする体制も紆余曲折があった中で、ETのサポート体制を強化することで、生徒が安心して英語での研究に取り組める体制を構築することができた。

ただ、研究内容に関しては前年度の「GLOBAL I」の取組から情報量は増えたものの、それをうまく展開することができていなかった。これは生徒側の問題ということより、我々指導する立場にある個々の教員の研究に対する指導の不慣れな点から引き起こされたと考える。来年度の「GLOBAL II」に向けて、今年度の反省に基づいた年間計画・指導方針・テーマ設定などを活動の最初から示せるように、マニュアル化できるものは作成していくことにした。

生徒の感想からは苦勞しながらも視野が広がり達成感を得られたことが伺えた。

＜「GLOBAL II」アンケートでの生徒の声＞

- ・全く話したことの無い人たちの中で、研究を進めていくのは上手くいくことばかりではなく、苦勞した。それぞれ調べ、情報を交換しあってだんだんと自分たちの調べる方向性などが一致していき、最後には意見も言い合えるようになり、とても充実した。
- ・研究グループのメンバーは初対面の人ばかりでしたが、とても親しくなることができ良かったです。グループで活動することの大切さが分かりました。また、「GLOBAL II」の研究を通して自分が将来どのようなことがしたいのかが具体的に見えてきました。
- ・発表会でも問題意識を持って、良い意味で批判的に発表を聞くことができた。
- ・フィールドワークやインタビューを行うことで、今までよりは少し発展できたと思う。
- ・グループで調べれば調べるほど課題は増えてきて、行き詰まったけど、話し合っただけでより深いものにできた。

③ 平成28年度の取組

前年度の「GLOBAL I」の経験があることと「GLOBAL II」が2年目であるため、教員も生徒たちも大きな戸惑いもなく課題研究に取り組んだようである。基本的には昨年度の取組を踏襲したが、研究テーマについては生徒が取り組みやすいものに修正した。

また、課題研究で利用できるパソコンの台数を増やしたり、指導する2年次団の教員に参考図書を配付したりして、生徒の活動や教員の指導がよりスムーズにいくような配慮ができた。

1学期は学類研修での意見交換に向けた調べ学習が中心となった。この期間では、チーム力を培い、コミュニケーション能力や知的好奇心を醸成することをねらいとした。

2学期は集中的に課題研究に取り組むことができ、各班は図書室の書籍やインターネットを利用する以外にも、自分たちの仮説を証明するための調査を積極的に行った。例えば、「住宅についての研究」班が地元の住宅建築メーカーを訪ねての質問、「食用サボテンについての研究」班が生産農家に質問、「発展途上国に対する援助についての研究」班が東ティモール日本大使館に電子メールで質問、「フェアトレードについての研究」班がフェアトレード商品のチョコレートを校内で販売、「児童労働についての研究」班が市内の小学校を訪れ小学生対象のワークショップを実施、「少年犯罪についての研究」班が他県の市教育委員会に電話で質問、などの活動である。準備不足の計画には、指導教員からの助言や指導があり、それらも含め、生徒の成長につながる良い経験となった。

初年度はSGH課題研究発表会を岡山市民会館及び旧内山下小学校体育館の2会場で分

割開催したが、今年度は校内で実施することにより、多くの班に発表の機会を提供することができ、聞く側の生徒も移動の制約がなく自由に行き来し発表を聞くことができた。

今年度は具体的な年間の予定と作成すべき成果物等を年度当初に周知し、計画的に取り組むことをねらったが、進捗状況は常に遅れ気味であった。週2時間では時間不足であることを痛感したがこれ以上の授業時間数はとれないため、休業中の時間の有効活用や内容の精選、指導方法の工夫が次年度への課題となった。

④ 平成29年度の取組

「GLOBAL II」も3年目となり、多くの教員がその実施に関わる場面が増えてきた。特に、前年度末2月に実施したSGH課題研究発表会の経験が、教員間の意識と情報を共有する大きな契機となった。というのも「異力」を統合しチームとして取り組んだ課題研究の成果を聴衆の前で発表することで、プレゼンテーションの力を高めることが実感できたからである。今年度も資料収集においては、書籍や論文など信頼度の高い情報源を利用するよう指導し、フィールドワークやアンケート調査等、生徒の積極的な活動を促していく方針で教員間の共通理解を図った。

1学期の間は具体的な研究テーマを絞ることに苦労した班が多く、岡山大学の先生に助力をいただきながらテーマを考えた。一度考えたテーマを何度か変更する班もあったが、このテーマ設定こそが課題研究に取り組む上で、大切な段階であり、批判的思考力を伸ばすチャンスと捉えて、時間をかけて指導を行った。

全体の流れは昨年度と同様である。集中的に課題研究に取り組むことができる2学期は、実験を行う班や地域社会と連携して調査・研究を進めようとする班が多く見られた。例えば、「日本における児童の課題と改善案についての研究」班が慶南外国語高校（韓国）とSkypeでの意見交換、「都市近郊における果樹栽培の存立条件についての研究」班による沢田地区の柿農家を訪れての聞き取り調査、「観光発展によって地域経済を活性化させる方法についての研究」班による牛窓町での現地調査など、多種多様な研究において、課題研究の中で生じた疑問を外部団体と協力して解決しようと試みていた。そこでは、柔軟な発想と積極的に活動する姿勢が見られた。

今年度の各班の活動の特徴は、書籍を利用して情報収集をしていたり、外部機関との連携やフィールドワークを行ったりして研究を進めた班がより増加していたことである。これらは、国語科と連携して夏休みに書籍利用を促したことや先輩の研究の進め方を参考にして、より説得力のある研究にするために必要なことを生徒自身が考えたことが要因であると思われる。

特に多くの時間を要したのは、各班での研究テーマの設定である。これは、知識不足や批判的思考力の不足が原因として考えられる。社会問題に目を向ける習慣や批判的思考力を向上させるような取組を各教科や学校生活、日常生活の中で行っていく必要がある。また、研究内容については、調べ学習の域を出ないものや信頼性に疑問のある情報の利用が散見された。これらについても次年度に改善できるような方策を考える必要がある。

⑤ 平成30年度の取組

「GLOBAL II」は4年目となり、SGH事業としては最終年度となった今年度は、これまでの取組の総まとめのつもりで取り組んだ。指導する2年次団の教員も初年度の経験者が一巡し2度目となる者も多く、スムーズに取り組めていると感じる。年間の指導計画や研究テーマ、基本方針に大きな変更もなく実施できた。大学の先生も継続して担当して下さる方も多く、高校生の柔軟な発想を評価して下さり、生徒も中間発表でのアドバイスを契機に研究を進展させることができている。テーマ設定には時間がかかるが、指導する側もテーマ設定こそが課題研究に取り組む上で大切な段階であると心得、アドバイスできた。研究に取り組む上で1年次に聞いた課題研究発表会が大いに役立っており、先輩の研究を土台として発展させている班も増えた。現在は研究もまとめの段階に入り、今まで収集した情報を分析・考察し結論を導き提案を考えているところである。

(3) 「GLOBALⅢ」

① 実施概要

「GLOBALⅢ」は、1・2年次の「GLOBALⅠ」「GLOBALⅡ」での課題研究の取組をさらに深化・発展させたいと希望した生徒が選択する科目である。1・2年次の研究はグループ単位で行っていたが、「GLOBALⅢ」は個人での研究を行った。

- ・年度途中で中間発表を、11月末には最終発表会を開き、全員が研究成果をプレゼンテーションソフトを使用して発表した。
- ・研究成果を中心とする「GLOBAL」に関する自分の3年間と今後についてのエッセーを作成した。
- ・研究成果について英語のサマリーを作成した。
- ・校外の論文コンテストやコンクールに応募した。
- ・研究成果を校内や校外で発表した。
- ・時間割の日程内で1単位時間、時程外の放課後や休業中で1単位時間とした。
- ・指導は国語・地歴公民・数学・理科・外国語・保健体育科から1名ずつ、副校長および教頭で担当した。

② 平成28年度の取組

SGH指定初年度の入学生が3年次生になり、初めての「GLOBALⅢ」の授業が行われた。選択者は男女4名ずつの計8名だが、他の講座との関係で7名と1名の2講座での開講となった。8名の生徒を8名の教員が担当し、きめ細やかな指導を行う体制で研究を始めた。授業では、主に生徒から担当教員に研究の進捗状況の報告と、次週までに取り組むことの打ち合わせを行った。書籍を調べることとパソコンを使うことが可能であるため、授業場所は図書室とした。

夏の長期休業を挟んで前半、後半と期間を区切って研究に取り組んだ。まず前半は夏の長期休業前までに、生徒が前年度行った課題研究を深化・発展させ、どのようなテーマにどのような調査方法で取り組むかについて、打ち合わせを行った。担当教員は、生徒に昨年度までの取組で得た知識や、研究手法、人的ネットワークなどを駆使するように指導し、生徒も自らのこれまで蓄積したことを活かして課題研究を行うことを心がけ、計画を立てていった。そうした課題研究の計画を具体化したうえで、長期休業中の取り組みを行うようにした。

後半では、長期休業中の調査やフィールドワーク（海外でのものを含む）を活かして、自らの研究のまとめを行い、研究成果を校外の論文コンテストに応募したり、AO入試などの進学に向けた資料作成に活用したりした。また、他校や外部機関での発表など、校内にとどまらない研究成果の発信を積極的に行うようにした。そして最終的に研究成果を中心に、1年次から3年次までを振り返り、この課題研究を通じて得たことを将来にどのような形で生かしていくかをエッセイにまとめた。

8名の生徒の研究テーマは、それぞれ「一般企業による新しい海外支援体制のあり方」「発展途上国へ広げる快適空間」「女性の高学歴化と少子化の関係」「グローバル・タックスで世界を変える～南北問題の解決に向けて～」「社会発展と環境保全の両立する持続社会についての考察と提案」「舟運復興計画～災害時の船の活用～」「日本の新しい国際貢献の在り方」「発展途上国での雇用開発に向けた新しい提案」である。

「NRI（野村総合研究所）学生小論文コンテスト2016」に3名、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2016」に2名、「鳥取環境大学 第13回全国高校生環境論文TUESカップ」「京都学園大学 高校生論文コンテスト2016 バイオ環境部門」にそれぞれ1名が応募し、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2016」では、応募総数30,087作品から117作品が受賞対象となったが、上位10作品に含まれる審査委員特別賞（ラオスへの研修旅行が副賞）を1人が受賞、もう1人が佳作を受賞した。また、「NRI（野村総合研究所）学生小論文コンテスト2016」では、応募総数2,915作品から26作品が受賞対象となった中の奨励賞を受賞した。

11月には岡山県庁を訪問し全員が教育長に3年間の取組について報告し、1月には岡